

## 若手職員に聞きました！《第3回 採用されて5年目以上の職員》

「若手職員に聞きました！」第1回、第2回でお伝えしたように、九州管区行政評価局の職員は、管区局、事務所、センター等を異動しキャリアを積んでいきます(総務省本省での勤務を経験する職員もいます。)。最終回である今回は、採用されて5年目以上の職員に聞きました。

- Q1 現在、どのような業務を担当していますか。
- Q2 これまでの業務の中で、印象に残っている出来事を教えてください。
- Q3 職場の働きやすさや、雰囲気について教えてください。
- Q4 公務員を目指すみなさんへ、メッセージをお願いします。



A1 九州管区行政評価局評価監視部で、行政評価・監視業務を担当し、各府省の施策の効果や、その課題について実地調査を行っています。実地調査では、国の出先機関のほか、地方公共団体や民間企業にも出向き、現場の実態について幅広くヒアリングを行います。

調査のテーマは原則4か月ごとに変わり、その分野は社会福祉、運輸、学校教育、農林水産業、災害対策など多岐にわたります。私たちは、それらの分野については素人ですが、充実した調査を行うためにも、調査前は関係法令や制度を綿密に勉強し、相手機関の担当者にひけをとらない知識を身につけるよう心がけています。

また、実地調査に当たっては、相手機関のミスや問題点を単純に追求したり、重箱の隅をつついたりするような調査をすることは避け、問題の発生原因や改善策を意識しながら、その問題が生じた背景や因果関係を目を向ける必要があると考えています。

A2 平成29年度に、「空き家対策に関する実態調査」(全国計画調査)を担当しました。調査に当たっては、市町村の担当者に対するヒアリングを行うだけでなく、実際に調査対象市町村の街中を歩き回り、倒壊寸前の危険な空き家を目の当たりにし、問題の深刻さを改めて認識したのが印象に残っています。このようなフィールドワークを行うところも、当局の業務の特徴だと思います。

A3 評価監視部は、**フリーアドレス**を導入することで、班内の情報共有が活発化し、円滑なコミュニケーションの実現を図っています。さらに、実地調査に関する打合せや調査結果の取りまとめに当たっては、若手職員と上司の間で活発な意見交換が行われるなど、風通しのよい職場だと感じています。

また、行政評価・監視業務は、調査の事前準備から実地調査、最終的な調査結果の取りまとめまで、ある程度自分のペースで仕事を進めることができるので、効率的に仕事を終わらせて、できるだけ定時に帰宅するとともに、積極的に年次有給休暇を取得するように努めています。

A4 行政評価・監視業務では、若手職員であっても、調査の準備から取りまとめまで、担当する調査項目について一人の調査官として責任をもって仕事をすることが求められます。

調査の準備をする際は膨大な資料を精読する必要がありますが、どれほど入念に準備していても、ヒアリングをすると、準備段階では全く想定していなかった事実が発覚する場合があります。

その時は、頭の中で事実関係を再構築しながら、質問内容を臨機応変に変更し、その調査結果を論理的に取りまとめる必要があるなど、決して簡単な仕事ではないと思いますが、それだけやりがいの大きい仕事でもあると感じています。

### フリーアドレス

九州管区行政評価局は、評価監視部、管理官室にフリーアドレスを導入しており、固定した座席を設けていません(写真参照)。班内のコミュニケーションを活発にしたり、調査テーマに応じて席を移動したりすることで、効率的な業務の実現を図っています。

### テレワーク

職員が自宅等において業務を行うものです。九州管区行政評価局では、管区局、事務所、センターをあわせて、毎月多くの職員が利用しています。

A1 九州管区行政評価局総務課で、会計業務をしています。業務で必要な物品の購入・管理、出張費用の請求内容のチェック、会計検査院や本省に報告する書類の整理など、いわゆる「裏方」の仕事です。細かく厳格なルールが決まっており、それに基づいて仕事をしなければなりません。いつも、間違いを見つけ出す最後の砦になった気持ちでチェックをしています。

A2 採用されて3年目の時から、本省で6年間勤務しました。その際、初めて評価監視の取りまとめをしたことが印象に残っています。地方の調査結果を元に、勧告内容や論理構成を班内で何度も何度も検討し、ある程度形にしたところで幹部に報告するも、だめだしを受け、修正し、再度説明し…の繰り返しでした。世間に公表するものであり、相手省庁を動かすだけの内容になっていなければならないので、幹部からとことん詰められました。

なかなかOKが出ず苦しい日々でしたが、班員一体となって議論を重ねるのはおもしろくもあり、担当者として責任をもって資料を作成し、説明できることを誇らしく思いました。

一つの調査を仕上げる苦労を痛感した経験から、その後の調査では、取りまとめをイメージしながら、必要な情報を取りこぼすことなくヒアリングを行うよう心がけています。

A3 私は、第1子の育休中に第2子を出産し、合計3年半育休を取得しました。

復帰前は、ブランクが長いのでうまくやれるだろうか、歓迎されないのでは、といった不安もありましたが、まったくの杞憂でした。実際復帰してみると、上司も同僚も温かく迎えてくださり、初めて携わる業務については、やり方や考え方を懇切丁寧に教えてくださったので、すぐに仕事の勘を取り戻すことができました。

現在は、保育園に通う子供のお迎えがあるので、昼休みを30分短縮し、その分早めに退庁しています。また、月1回程度**テレワーク**を行うほか、子供の急な病気の時も、当日申請してテレワークを行うことがあります。保育園には行かせられないけれども、かかりきりで看病しなくていいときなどに、仕事を滞らせずに済むため、助かっています。

A4 私は、出産しても働き続けたいと思い、仕事と育児の両立制度が整備されている公務員になりました。現在、実際に育児をしながら働いてみて感じるのは「働きやすい」ということです。職場に、理解してくれる、応援してくれる雰囲気があります。

今は応援される側の人間ですが、子育てが一段落したら、応援する側に回って、育児や介護で大変な同僚や後輩(もちろん男女問わずです。)を全力でサポートしていきたいと思っています。

当局の仕事に興味をもってくださったみなさん、ぜひ一度職場の雰囲気も見に来てください。

